

だ

か

あ

よ

ん

れ

川上

宗薫

へ

だ	が	お
ぼ	ン	れ
川上	宗薫	

おれ、ガンだよ

定価 一二〇〇円

一九八五年七月一日 第一刷発行

著者 川上宗薫

発行者 石井裕二

発行所 株式会社 海田書房

東京都中野区中野三―三四―二九
パールスカイビル ニューヨーク内
電話 〇三(三八三) 六八八八

印刷 睦印刷工業株式会社
製本 株式会社 手塚製本所

発売元 株式会社 星雲社

東京都文京区小石川五―一九―二五
電話 〇三(九四七) 一〇二一

© Sokun Kawakami 1985

ISBN4-7952-2652-0 C0093 ¥1200E

Printed in Japan

目次

おれ、ガンだよ	5
ガン・マンの土曜日	61
なんのために	95
墨	117
ヤキモチ日記	139
恥	179
シンコペイション	207

装帧／石井俊臣

おれ、ガンだよ

おれ、
ガンだよ

私は、約二カ月これまで経験したことのない左の肩こりを感じ続け、老化現象の一つと受け取っていた。左の鎖骨きこつの上のグリグリに私が出たのは、去年昭和五十九年十一月から十二月にかけて、正午過ぎに行なう散歩の途中であった。私と圭子とは一緒に出かける。ブラブラした散歩は意味がないと聞くので、なるべく速足で歩く。そこは私たちが、「太陽道路」と呼んでいる成城の横道筋だった。一直線の、約二百メートルに、真上から太陽が注いでいる。グリグリのことを聞いた時、圭子は、とっさにダイ坊のことを思い出した。ダイ坊というのは、一年前に死んだ、体重九十キロもある、マスティフ種の犬だ。その犬の胸にできたグリグリを、獣医の安達先生にとってもらった。なんでも、圭子に言わせれば、豚のレバーをグチャグチャにしたような感じだそうで、安達先生は、悪性だと判定した。

圭子は、私のグリグリと、ダイ坊のグリグリを、いちおう結びつけてみる。そして、彼女は、こ

こ三年来、世話になっている東邦医大大橋病院皮膚科の、漆畑先生に連絡し、結局私は、半ば、強制連行されたようなものであった。

〔警察に呼ばれるより胃カメラの方が楽、警察の方がガンより楽〕

私がガンだと知った時ひよいと思ひ浮かんだ短絡的な感想がそれだった。私は一九八四年の春、売春防止法に絡む事件で一日証人として警察に呼ばれたことがある。私はビクビクしカッコわるいと思ひながら朝警察に向かったのだが、その時、あのいやな胃カメラの方がまだましだと思ったものだ。そして、ガンより楽な警察というのは一カ月ほど拘留される場合を想定したものである。

それほどガンと知った時は、〔ジャーン〕だった。

同居人の圭子〔わかり易くいうと内縁の妻で六十歳の私より三十歳年下の女性で、家事一切をよくやってくれているので、こんな伴侶に恵まれたことを私は神に感謝している〕が漆畑先生に電話したのが土曜〔十二月八日〕で診てもらいに行ったのが火曜〔十二月十一日〕である。運よくエコー超音波専門の桑島先生がいて診てもらった。このエコーという機械は肝臓とか胎児も映し出すことのできるCTスキャンと並ぶほど画期的な機械である。さっそくその夜のうちに漆畑先生から圭子に電話がかかってき、私がガンと知ったのは圭子によってだった。私は、一九八二年〔昭和五十七年〕の春シッシンで東邦医大大橋病院に入院し、その時精密検査を受け、食道に穴が空きかけていることがわかり、すぐさま東京女子医大に入院しその道の権威遠藤光夫先生に手術してもらって生命が助かった。十年にわたって毎日約一本ブランディを水無しで飲んでいたので、食道が薄めた

劇薬で焼けたといった理屈であろう。私は手術後はアルコールを控えた。そして、ガン発見の時は寝る前にブランディのお湯割を三分の一度度しか飲めない体質になっていた。煙草を止めてから約二十年なので、酒も煙草もやらず、週一回鍼に通い、食事には気をつけ、昼は仕事のあとでできるだけ速く二十分ほど歩く。

しかも、八月の下旬の胃カメラ検査、九月中旬の食道潰瘍手術の痕を検べるCTスキャン^{すぶ}も凡て合格であった。

私はものを書いている。私は自分のことについてわりと洗いざらい書く^な質なので食道の手術の時にも遠藤先生を初め関係の諸先生にガンならガンと率直にいつてもらいたいと頼んでいて、その件については諒承を得ていた。それは東邦医大の漆畑先生や内視鏡専門の酒井先生に対しても同じである。だからこそ漆畑先生は圭子に電話で報せてくれたのだが、さすがにことがただけに本人の私には直接いい辛かったのだろう。

ヘジャーンは食道に穴が空きかけていて一刻を争そうという報告を受けた時に既に経験済みなので、この二度目のヘジャーンの時は多少免疫ができていて救われる感じがあったが、ヘジャーンには変りない。お蔭で楽しみにしていた十一時十五分からのテレビのボクシング中継のことなど頭から吹っ飛んでしまった。漆畑先生は面倒見のいい人でその日のうちに遠藤先生に連絡をつけてくれた。

私は悪運の強い男だと自分でも思い他人にも思われている。そのことは既に食道潰瘍手術のあと文藝春秋に発表した「生還記」という手記の中で書いてある。私の家は長崎の、しかも原爆が投下

された中心にあって母と幼い二人の妹が死んだが、私はちょうどその時佐賀の陸軍病院の分室にいて助かった。他の入院患者が次々私服に着替えて帰って行くのが羨ましかった。私が帰れなかったのは属していたのが野戦部隊であったために手続きが遅れへオレってなんでこうもツいてないんだろう〜と思っていた。そもそも肋膜を患っているのに兵隊に取られたことからしてツいてないと思っていたのだ。

けれども、退院が遅れたために私は原爆を免れたのだ。そして、食道潰瘍で助かったのが二度目の悪運、つまり、アトピー性シッシンなどで入院する者など滅多にいるものではないのに入院してその序でに検査し、しかも、それだけはいやだと主張していた胃カメラを漆畑先生から半ば懇願される形で呑んだ処、重大な発見があつて名医の手で手術を受けることができたのだ。更に、名医一覽表のような金原出版の社長と懇意という幸運が加わった上でのことである。だから、強運を信じていたのだが、このガンでその信仰が失われた。

このガンが早い発見でそのために助かったとなれば三度目の強運ということになりそうだが、私はそうは受け取らない。せっかく戦場から生きながらえて帰ってひと休みしている処に思いがけず召集令状がきて、また弾丸の下を潜らなくてはならなくなった辛さといった心境である。

本物の強運の持主なら食道潰瘍のあの三役級の大手術を受けてまだ丸三年経っていないのにガンに見舞われたりするものだろうか。

私の、それほど親しくはなかったが佐藤愛子さんを通じて知り合った小説家のTは小脳が萎縮するという奇病に罹って思い悩み、自分のアパートのベランダで首吊り自殺した。Tは慶応病院の大

部屋に佐藤愛子さんと一緒に見舞に行った時私が「こんな大部屋じゃ仕事できないね」というと、
こういった。

「ボクは宗薫さんのようにとても書ける気分になんかなれないなあ。それに個室で一人きりなんて
淋しくてとてもじゃないよ」

私がTの立場であればさっそく手記を書くだろう。現に私は食道潰瘍の手術の時にも約一月半入院したにも拘^{かか}わらず週刊誌、新聞、月刊誌、連載、単発いずれも穴を開けなかったことが自慢である。更に術後三日目から廻らぬ舌を動かし、ともすると薄れる意識の中から「この今でなければ書けぬことがある」と思って口述を始めたというのも自慢の一つだが、こういう根性というものは、あとになって考えてみると、性悪^{しやうわる}もしくは賤^{いや}しさの類のような気がしなくもない。のちに私は「恥」という短篇を書いたがその中で、手記を薄れる意識の中で口述した件について「ものかきの本能などといまいな飾り立てで済ましているがじつは……」とことわり、東南アジアのホテルで見かけたメイドの必死の眼つきと自分の根性とを重ね合わせている。部屋係のメイドにとっては客が外出する時に枕許にチップを置き忘れていないかが差し迫った関心事というよりむしろ死活の問題とでもいった重大事らしいので、そんな眼つきになる。私のプロ根性というのも、そういった貧しさや賤しさの親戚筋に当るのではないかと考えることがあるが、そう思ってしまうとわざとらしい「謙虚」を自慢しているみたいでまた舌打ちしたくなる。だが、よく使われる「根性」という言葉は私には「よいもの」とか「美しいもの」とは見えない。それはむしろ「性悪」と同意語ではないかという気がする。

ガンと報されないことを望む人と報されることを望む人と二派に分かれている。外国では報せる方が多いらしく、その傾向は強まる一方だという。ガンと知った途端ショックを受け、そのためガンが悪化して死に至るということもあるらしいのだが、現段階の進歩した医学の許では、むしろ報せた方が周囲も気疲れしなくてよいのではないか、本人もいち時は「ジャー」だろうが、すぐに保身のサーモスタットが作動して、生活感覚のオクターブが違ってくるので、健康人が考えているほど減入りはしない。

私は食道潰瘍の手術後、調子に乗って日本酒など飲み過ぎガンマGTPが一三〇まで上がったので以後ブツリといった感じに控えた処二カ月後には五〇まで下がり、以後アルコールなしでも平気になったというより他人の飲むアルコールの匂いが気になるほどにまでなってしまった。

ところが、ガンとわかった途端「肝臓なんてクソくらえ」という気持になり、ブランディのお湯割りを飲んだところおいしくて二杯お代りしてしまい、そのあと、文藝春秋の忘年会、我が家の忘年会とワイン、ブランディのお湯割りの類を飲み、「アレー、においを嗅ぐのもいやだったのは自己暗示だったみたいだな、やっぱりオレはアルコール好きなのだ」と自分の中でバレてしまった。

なんとなくムシの報せのようなものがあつた。だから、私は、十一月に入つて弁護士丸山雅也氏に頼んで遺言書を作る氣になつた。氣になつてゐたのは体重が八月中旬あたりからだつたと思うが二キロ減つたことだつた。手術前は五十五キロ、術後はコンスタントに五十キロだつたのである日シャッキリが丸一日止まらなくなつたことがあり、それで一キロ減り、更にまた一キロ減つたの

だが、それは五月から飲み始めたアロエのせいだと考えることにしていた。青汁ではなく無色透明無味、水の濃いやつといった感じだ。アメリカからの輸入品である。(これは効く)と思ったのは、肌つやがよくなったのと、ペニスの威力が眼に見えて強くなったからである。アロエは私の体重を更に適正に保ってくれたのかもしれない。

けれども、一方では、なにかしらムシの報せのようなものがあつたのは理屈ではない。円山雅也氏は遺言書の見本を郵送してくれたが、終りの処に「昭和六十年〇月〇日」とあつた。私はその時も遅過ぎると思い、すぐ電話して「五十九年でもいいんでしょ」と訊いた。もちろん五十九年でもよいわけだが、六十年では間に合わないかもしれないと思つたのはなぜなのか、その処も理屈ではなくムシの報せとしかいいようがない。

ガンと報されてから、家でNHKのテレビでモントルー・ジャズ・フェスティヴァルを聞いた。頬がなにかの鳥の咽喉^{のど}のようにふくらむディジイ・ガレスピイのトランペット、ロン・カーターのベース、レーガン大統領に似た顔の男のドラム。半裸の男女が晴れた海辺に群れていて、ヨットが映し出されたりしているのだが、ジャズと昼間の晴れた海とか健康な若者との間にはあきらかに異質なものがある。ガンである私はジャズに親しみを感じたので、いっそう異和感にも敏感になつてゐる。ガンに冒された人の中には独り淋しく演歌を聴いて我が身の悲運を嘆くといった体質もいるかもしれないが、私は、ガンになつてからはいっそう演歌がバカバカしく思われる。もともとあまり好きではない。なぜやたらと「北」という言葉が題名に織りこまれねばならないのか。南から便りがあつたら演歌は成立しえないのか、陽に灼けた肌で南国の海を泳ぐ女の気持を演歌は包括でき

ないのではないか。演歌の北の感情に揺り動かされて泣くのは自分をドラマの主人公と受け取る甘い見があるからではないのか。ジャズの曲、そして、演奏家たちは、どんなに明るくても今すぐガンで死んで不思議でない刹那的な気配を湛えている。演歌の感情や歌手は「明日もある」という前提の許に悲しみを歌っている。特に演歌歌手が泣きながら歌っていても未来が輝いている立居振舞なのはなぜだろう。演歌を聞いて自分の悲しい境遇を慰めている、そういう人は、自分だけが悪いクジを引き、世の一切の不幸を背負わされていると考えているからだろう。しかし、世の中に不幸な人は充ち溢れている。人を不幸にしているのは、その人が自分を不幸と思うからであり、悲しい運命だと受け取るのは、半分はその運命を選んでいるからだといえど酷であろうか。現に私はガンを罹っているが、なんてオレって不幸なんだろうとは思えない。むしろ、ここでくたばってもお釣りがくるはずだと醒めた意識の領域で考えている。

そう書くと、いかにも悟りきったようだが、じつはそうではない。戦争体験で多くの仲間を失って自分たち少数だけ生き残った中には「あとは余生ですよ」などといって生き延びている人がいるが、〈余生〉は大きな自分にはいいきかせる言葉でしかない。私は受け取っている。余生にしてはいやに仕事に打ちこんでいるではないか。金なんかすっかり貯めこんだりしちゃって。頭は〈余生〉と考えていても、例によって、喉元過ぎれば熱さを忘れてしまうので、シャカリキになっているのだ。うまく行かなかった時に〈余生〉は便利な言葉になる。へどうせ余生なんだから、もらいものなんだから、どうってことねえや」と自分を慰めることができる。

けれども、現実に余生の人がいるのも事実である。この世にまた生まれてくるようなことはマッ